News Letter　2014.7.25　第 59 号

たちばな

京都大学男女共同参画推進センター
Gender Equality Promotion Center

介護に関する講演会シリーズ　第５回
「がんと共に生きる人を支える －緩和ケアをどう活用するか－」

介護に関する講演会「がんと共に生きる人を支える －緩和ケアをどう活用するか－」を、6 月 26 日（木）、京都大学杉浦地域医療研究センターホールにて開催しました。本シリーズは、育児介護支援事業ワーキンググループ主査の山肩 洋子・情報学研究科准教授を中心に推進しているもので、今回で 5 回目となります。

今年度は講演者として、淀川キリスト教病院のホスピス、がん支援相談室で、長年、がん看護専門看護師として活躍された、京都大学医学研究科人間健康科学系専攻の田村 恵子教授にお願いしました。

先生が働く姿は、NHK「プロフェッショナル 仕事の流儀」で紹介され、テレビドラマ「奇跡のホスピス～人生の“わすれもの”ってなんですか？～」の主人公のモデルにもなりました。

山肩主査の司会進行により、はじめに稲葉 カヨ・副学長、男女共同参画推進センター長による開会の挨拶がありました。

そして、田村先生より「がんと共に生きる人を支える －緩和ケアをどう活用するか－」の講演が行なわれました。

はじめに、「がん対策基本法」に基づく「がん対策推進基本計画」についてお話がありました。「がん対策推進基本計画」の見直しに伴い、従来は治療の初期段階で実施されていた緩和ケアが、がんと診断された時からの実施へと、緩和ケアの開始時期がより明確化されました。また、すべてのがん患者とその家族の苦痛の軽減と療養生活の質の維持向上が、全体目標の一つとして定められました。がんを生きる患者は、身体的苦痛だけでなく、同時に精神的、社会的、スピリチュアルな苦痛も感じており、それらは互いに関連し合って、その人の苦痛として体験されています。誤解されがちですが、緩和ケアとは、がんの医療を単に病気に対する医療としてだけでなく、身体と心、社会生活、あるいは家族まで含めて支えていく考え方です。そして、患者やその家族の痛みなどの身体的・精神心理的・社会的・スピリチュアルな問題を早期に発見してケアすることで生活の質を改善します。がんの進行度に関わらず、身体や心の“つらさ”があれば、それは緩和ケアの対象となります。がんと診断された時から、がんそのものに対する治療と並行して、痛みなどのつらい症状を緩和する治療を受けることで、受けなかった場合に比べて生活の質が向上するばかりか、生命予後も良くなる可能性があることを説明されました。

心の苦痛をとるための「気持ちのつらさ」のケアをする際に、精神腫瘍医 (精神科医、診療内科医) などがカウンセリングを行うとともに、必要に応じて抗うつ剤や睡眠導入剤を処方したり、身体の苦痛をとるために、医師がモルヒネ等の鎮痛薬を処方することがあります。薬物療法とセルフケアは同時に行うことで、より効果的な疼痛緩和が行えます。これらの薬を否定せず、医師や看護師や家族と情報を共有しながら、きちんと飲むこと、緩和ケアを積極的に取り入れて、痛みや症状をやわらげることで、治療の効果が最大限に上がるということも述べられました。

そして、患者や家族から見た望ましい緩和ケアとして、

「がんと共に生きる人を支える －緩和ケアをどう活用するか－」

日本人が「望ましい死」を迎えるために重要だと考えていることを、参考として次のようにあげられました。

・身体的、心理的な苦痛がないこと
・望んだ場所で過ごすこと
・医療スタッフとの良好な関係
・希望や楽しみがあること
・人生を全うしたと感じられること

その他に信仰をもつこと、など―「信仰をもつこと」に関しては、「死」という科学的に証明できないことにおいては、宗教の考えが気持ちを楽にする効果もある、との考えを示されました。

講演後の交流会は、あらかじめ参加者が記入した質問用紙を見ながら、ひとつひとつ先生が回答する形で進められました。医師や看護師などの医療関係者、医学生、病院ボランティア、病院経営者など様々な職種の参加者から寄せられた質問は多岐に及びましたが、自身の経験談を交えながら丁寧に回答していただきました。その中で、身近な人物ががん宣告を受けてしまい、今後どのように接するのが良いか、という質問がありました。周りの人間は態度を変えずに今まで通りに接することが大切であること、また、「頑張って」という言葉は良くないとの考えもあるけれど、信頼関係が築けている者同士であれば、患者が弱音を吐いた時などは、「もう少し頑張ろうよ」というように声掛けするほうが自然であると回答されました。その他患者の家族や友人が気にしていること、どうしていいのかわからないことに対しては、具体例をあげながら説明されました。

最後に、足立 壮一・医学研究科教授・京大病院病児保育室長の挨拶により、盛会のうちに交流会を終了しました。

センター新施設完成

センターの新施設が完成しました。平成 26 年 8 月より、新施設にて業務を行います。

ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」

ポケット・ゼミ「ジェンダーと科学」は、男女共同参画推進センターの施設を使用し、グループワークを取り入れるなどして、ジェンダーや性差について、学生の理解を深めることを目的に開講しています。今年度は、全 15 回を、5 人の講師で担当します。

平成２６年度 保育園入園待機乳児のための保育施設 利用者募集

学生、研究者の学業、研究と育児の両立を支援することを目的とし、男女共同参画推進センター内に、「保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けます。この保育施設は、現在、保育園の入園待ちを余儀なくされている研究者等を対象とします。運営については、民間企業に委託し、大学が一部費用を負担して実施します。

■概要

実施期間	平成 26 年 9 月 1 日～平成 27 年 3 月 31 日
実施日時	月曜日から金曜日、9 時から 18 時 （時間外は、8 時から 9 時と 18 時から 20 時）
対象乳児	原則として生後 9 週目～ 15 ヶ月未満の健康な乳児。15 ヶ月になる月の前の月まで受け入れます。
定員	12 名
利用資格	原則として、京都大学に所属する学生及び研究等に携わる教職員
利用料金	週 5 日利用：50,000 円 / 月（学生 40,000 円） 時間外保育は、別途料金が必要。 利用曜日を指定し、週 2 日または、週 3 日の利用も可能ですが、週 5 日利用希望者が優先されます。

利用を希望される方は、センターのホームページをご覧いただき、必要書類を提出してください。
url　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/

連載：研究者になる！－第 50 回－

答えはひとつではない

野生動物研究センター・教授
村山 美穂

研究者になりたい、とはあまり思っていなかった。職業としての絶対数が圧倒的に少ないので選択肢になり得ないし、自分がなれるものとも思わなかった。いま、ポケゼミで研究室に来る新入生で、将来研究者になりたいという人はかなり多い。研究者が以前より身近な職業になったのだとしたら、それは科学にとって喜ぶべきことだ。しかし「研究がしたい」のと、「研究者という職業につきたい」のと、その順番を間違えたところに、様々な論議を呼んでいる論文問題の根っこがあるのかもしれない、とも思う。

答えがいくつもあるものより、答えがひとつのほうがいい、と子供の頃から思っていた。大学進学にあたって理系か文系かを選ぶときも、答えがはっきりと出る理系のほうが自分に合っていると思った。それなのに今では、性格の形成という、答えがいくつもどころか、あるのかどうかすら定かでない分野に迷い込んでしまった。

大学院では、それまでの血液型などに代わって新たに用いられ始めていた遺伝子解析の技術を使い、ニホンザルの父子関係を解明する研究に取り組んだ。育児行動からは判別できないため謎だった父子関係が明らかになってみると、サルの社会で重要な意味を持つように見えた順位は、繁殖に大きく影響しないという、意外な結果が得られた。日々の行動と、その最終ゴール（と進化的には考えられる）としての繁殖には、やはり隔たりがあるようだ。行動の個体差に直接影響するような遺伝子を探したいと思うようになった。

行動の個体差、すなわち性格の形成には環境要因と遺伝要因の両方が関与しているが、環境要因は観察から推定できるのに対し、遺伝要因には未解明の部分が多い。ヒトで脳内の神経伝達やホルモン伝達を制御する遺伝子が性格に影響するという報告にヒントを得て、チンパンジー、シマウマ、ゾウ、イルカなどの集団でくらす動物、あるいはイヌやネコなどの伴侶動物、さらには鳥類から、イカタコなどの頭足類まで、様々な動物種で相同遺伝子の個体差を探索し、性格との関連を見いだしつつある。遺伝子型から性格傾向、すなわち個体の心をある程度予測できるようになれば、身近な伴侶動物や作業犬、直接観察や動物園での飼育繁殖が難しい野生動物との、よりよい共存が実現できるのではないか、と期待しながら、研究を進めている。

性格や行動を理解するのに、遺伝子によるアプローチのみで、単純明快なひとつの答えが出るわけではない。同じ遺伝子型を持っていても、DNA 修飾などの様々な調節機構の影響で機能の差が生じており、大量ゲノム解析の時代になって遺伝子の働きについての理解が進めば進むほど、説明できないことが無数にあるとわかってくる。さらに環境要因も加わるのだから、まるで性格という大海で溺れている気分になることもしばしばである。

本来、世界は混沌としている。生物の集団は少しずつ異なる個体から成っていて、はっきりした境界があるわけではない。研究者は混沌の淵を覗いて、共通の集団や現象に命名をし、何らかの論理によって説明を付与する作業をしているのだが、解析技術や方法といったアプローチを変えて、よりよい説明を目指しても、完璧な説明は、そう簡単にできるものではない。大学とは、入るまでの受験勉強とは違い、問題も答えも無いところに、問題を見つけ、答えを見つけることの面白さを教わる場所だと思う。ゴールのない研究を長く続けるには、これを解明したいという最終目標があると同時に途中経過をも楽しむことが大切ではないかと思う。毎日の小さな発見を楽しみながら、目標に向けた問題と答えにつなげていく。そんな研究ライフが送れたら最高だ。

性格の研究をはじめて、個人差というのは、実際は表面に現れる以上に大きいかもしれないと思うようになった。「はい」という返事の中には、どれだけの「はい」と「いいえ」が含まれているのだろうか？「わからないこと」の存在を知り、「おもんぱかる」ようになるのが、研究者にもたらされる成果のひとつなのかもしれない。おりしも「共感性」という、分野を超えた研究グループに入れていただくことになり、異なる世界の話にわくわくしながらも、ますますその思いを強くしている。

Gender Equality Promotion Center

〒 606-8303　京都市左京区吉田橋町
電話　075（753）2437
FAX　075（753）2436
E-mail　w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP　http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/